



魔物に犯され
身も心も歪んだ愛に堕ちてゆく...

異形を愛した母

昔はハンターとして名を馳せた私も
今では愛しの息子と二人暮らしだ。
同業だった父親…あの人は
昔事故でモンスターに不意を突かれ
あつけなく帰らぬ人に…。
親一人子一人の私達が住んでいるのは
モンスターが蔓延る人里離れた土地。

けれども豊かな食物と水に恵まれていた。
土地を守るため日々私は
進入してくるモンスターと戦っていた。
いつかは遅しく育ったわが子と
共に土地を守っていくつもりだった。



今日も日課である敷地内の見回りを行っていた。
夜はモンスター達が活発に活動をする時間だ。
だが段々とモンスターも減り
安全になっていったこの土地。
そんな安息の日々が私の警戒心を鈍らせた…。





気配を殺しこちらを伺っていたモンスターが
一気に触手を私に放った。
見た事がないタイプだった。
どこからか流れてきた奴かもしれない。
完全に不意を突かれ
身動きが取れなくなってしまった…

(ああ…こんな簡単に死んでしまうなんて…
母さんはここまでみたい…
私の分まで強く生きて…)

我が子の事を思い、死を覚悟したその時だった。



「えっ……ああ……!?!」

触手は私の膣内へと侵入を始めた。
まったく予想だになかった出来事に
ますますわけがわからなくなる。
しばらく誰の侵入も許していなかった場所に
突如としてモンスターの体の一部が
無理矢理に入ってきた。
ひどい嫌悪感と得体の知れない恐怖を感じていた。

ズクッ

ズクッ

「くっ…何を…!」

オオオオオ

フ

フ

モンスターは私が怯んでいるのを見逃さず乱暴に押さえつけまるで生殖行為を行うかのように私の膣内を犯しはじめた。反撃のチャンスを伺い一気に仕留めよう…。そう思ったのだが…

モンスターはより激しく
触手を突き上げてきた。
たまらず私は声を漏らした…。

あっ…あんっ!!

イルン

ストン

イラッ

自分でも信じられなかった。
モンスターを相手に
しかもこんな危険な状況で私は
なんとという声を出しているのだ…
だが下半身から容赦なく伝わってくる快感は
私の忘れかけていた
『女の喜び』を思い出させた。



こちらの弱い部分を狙うかのように反応によって
攻め方を巧みに代えてくる。
耐えようの無い快楽に流され
無抵抗になった私を見逃さず
ピストンの速度が上がってくる。
モンスターの生殖器と思われるモノは
ビクビクと痙攣しながら膨張を始めた。
そして…

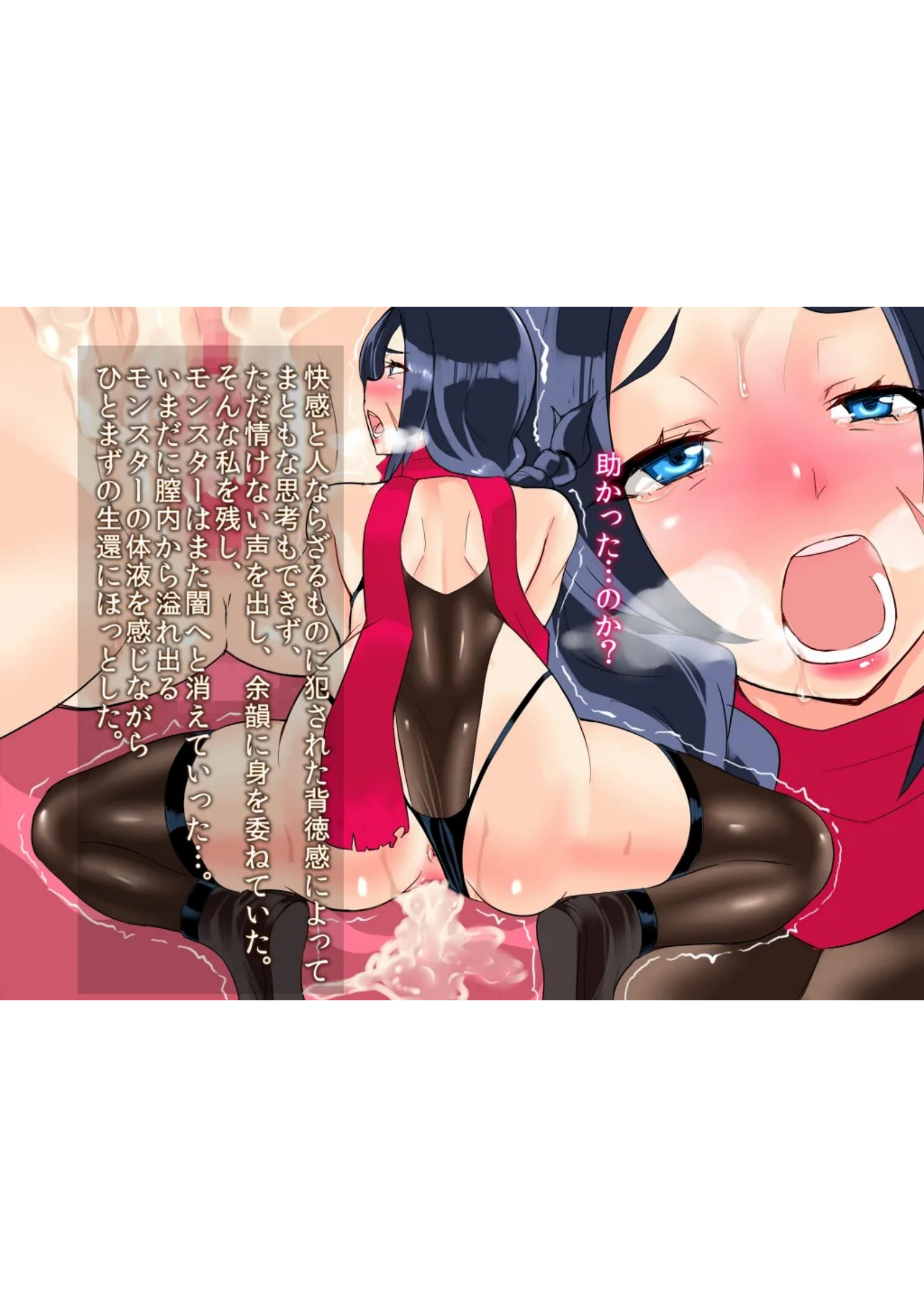


熱いくらいのモンスター^との体液が
私の中に放出された。
その衝撃で私も果てた…
モンスターの手によつて絶頂させられたのだ。

トッパッ

びやう

おほ



助かった...のか？

快感と人ならざるものに犯された背徳感によって
まともな思考もできず、
ただ情けない声を出し、
余韻に身を委ねていた。
そんな私を残し、
モンスターはまた闇へと消えていった...。
いまだに膣内から溢れ出る
モンスターの体液を感じながら
ひとまずの生還にほっとした。

母さん ぼーっとしてどうしたの？

え ええ…大丈夫 ちよつとね…

我が家に帰りあのモンスター[↑]の事ばかり考えていた。
一体何が目的だったのか何故生かされたのか…。
息子には何も話さなかった。
ただしつかりと私の体にあの快楽は刻まれていた。
下半身が疼いてしょうがない。

…明日またあの場所に行けば
「彼」は犯してくれるのだろうか。



そして翌日 あの場合に「彼」はいた。
襲い掛かってくる様子は無い。
恐る恐る私は彼に恥部を曝け出し彼の反応を待った。
モンスター相手にこんな無防備な……
あの夜から私は完全におかしくなっていた。





来た：彼は触手を伸ばし私の体を愛撫し始めた。
なんて優しく気持ちのいい愛撫なのだろうか。
股間から聞こえる水っぽい音に
自分も愛液を溢れさせている事に気づいた。

『来て：』 我慢できなくなった私は
心の底から彼を求めた。

ニキ

ニキ

トキ

何も考えず 彼からの愛を受け止めるだけ。
なんて幸せなんだろうか。
おま○こを突かれる度に
私は我慢もせず嬌声を上げた。

あ

母さん!! 一体何が…?!

私は一気に青ざめた…
息子がこんな私の姿を…?
色んな感情が一気にわき上がり
頭の中はパンクしそうだった。

なんで…(うん)…に
あつ…く
んあつ!!

遅いから心配で見に来たんだ…
今助ける! 僕だってこいつくらい…!

やめて!
彼を殺さないで!!

えっ…?



自分でもおかしい事を言っているのは
分かっていた…
だが彼を守らなくては…

彼はモンスターだけど私の事を
愛してくれているの
わかるの!!
体を交えて伝わってくるのよ!!

母さん こいつと…まさか…?

そうよ セックスして
愛を感じあっているの…
分からない?

わからないよ!



どうすれば分かってくれるの…
そう そうよ
セックスの気持ちよさを
あなたにも教えてあげる！
母さんの体で…！

母さん何を…！

ニボ

ガイ

もう止まる事は出来なかった…。
わが子のチ○ポを露わにし、口にはお張った。

ほら 段々硬くなってきた…



今気持ちよくしてあげる…。

母さんやめて…

はぁ…
はぁ…

力を抜いて…
母さんに全部委ねて…



母さんのナカ…どう？

母さんとホントに…セックスを…
母さん どうしちゃったんだよ…！

息子のチ○ポの形は少し…
今はもう居ないあの人を
思い出させる形をしている。
これもこれで…気持ちいい。
ちよつと彼に罪悪感を感じている。
でも彼を殺させないためだ。

愛しているから…。



気持ちいいでしょう？
セックス： おち○ちんが
母さんのナカでビクビクしてる

ううっ……ううっ……

母さんね 彼の事愛してるのよ
もつと気持ちいい事してくれるの 彼
すごいでしょ？

なぜ泣くんだろう。
分からない。
こんなにもセックスは気持ちいいのに。

でもあなたのチ○ポも気持ちいい……
父さんに似てきたわね……
母さんもうイっちゃう……
あたなも一緒に……！！

ズッ
ズッ
ズッ

母さん…母さん！

熱いのがナカに入ってくる…
息子とのセックスで絶頂してしまった…

気持ち…よかった？

もう…隠しておく必要もないわね
彼の事受け入れてくれるわよね…？
一緒に暮らすのよ

母さんは…それで幸せなの？

もちろんよ
母さんも一人の女…
雌だから…



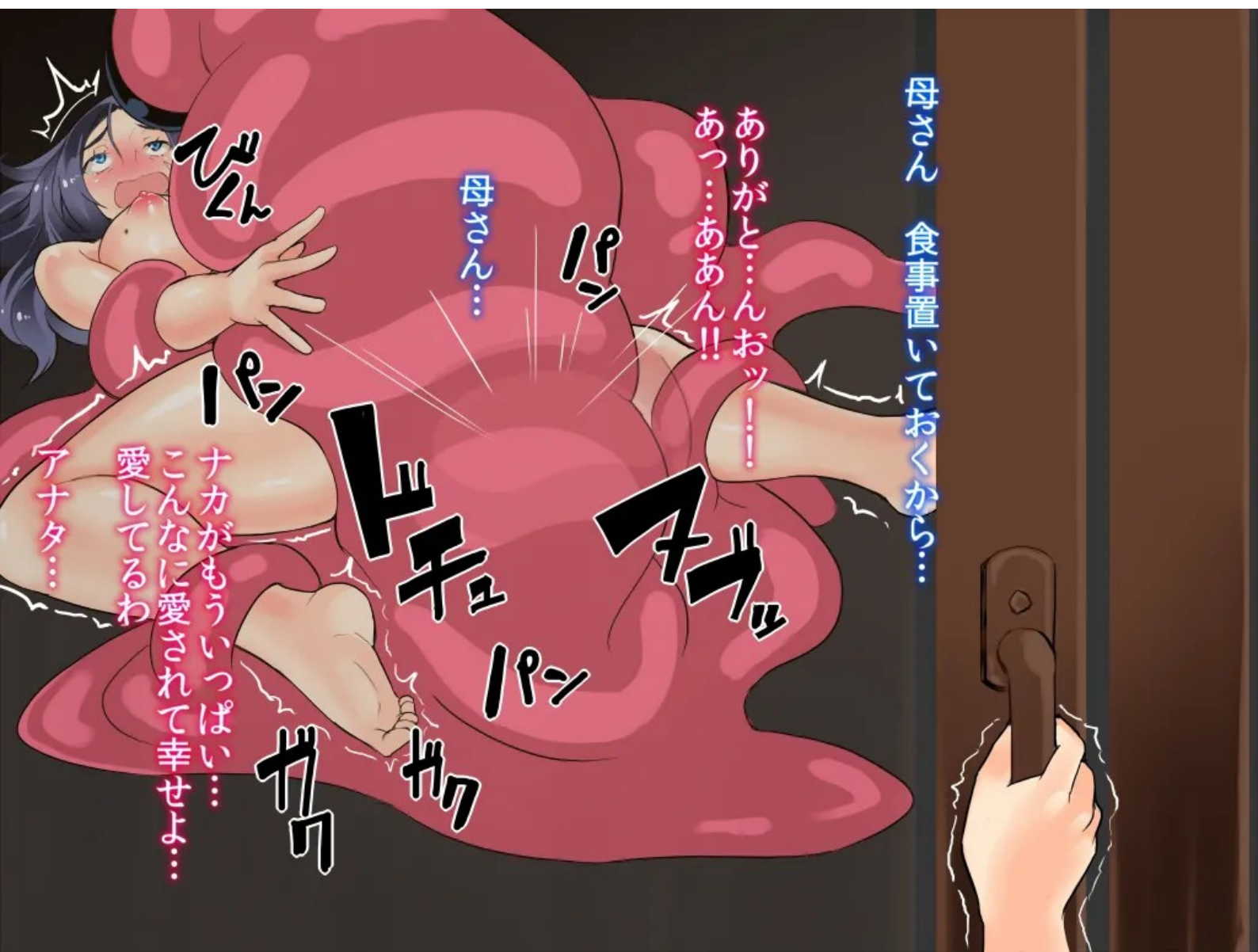


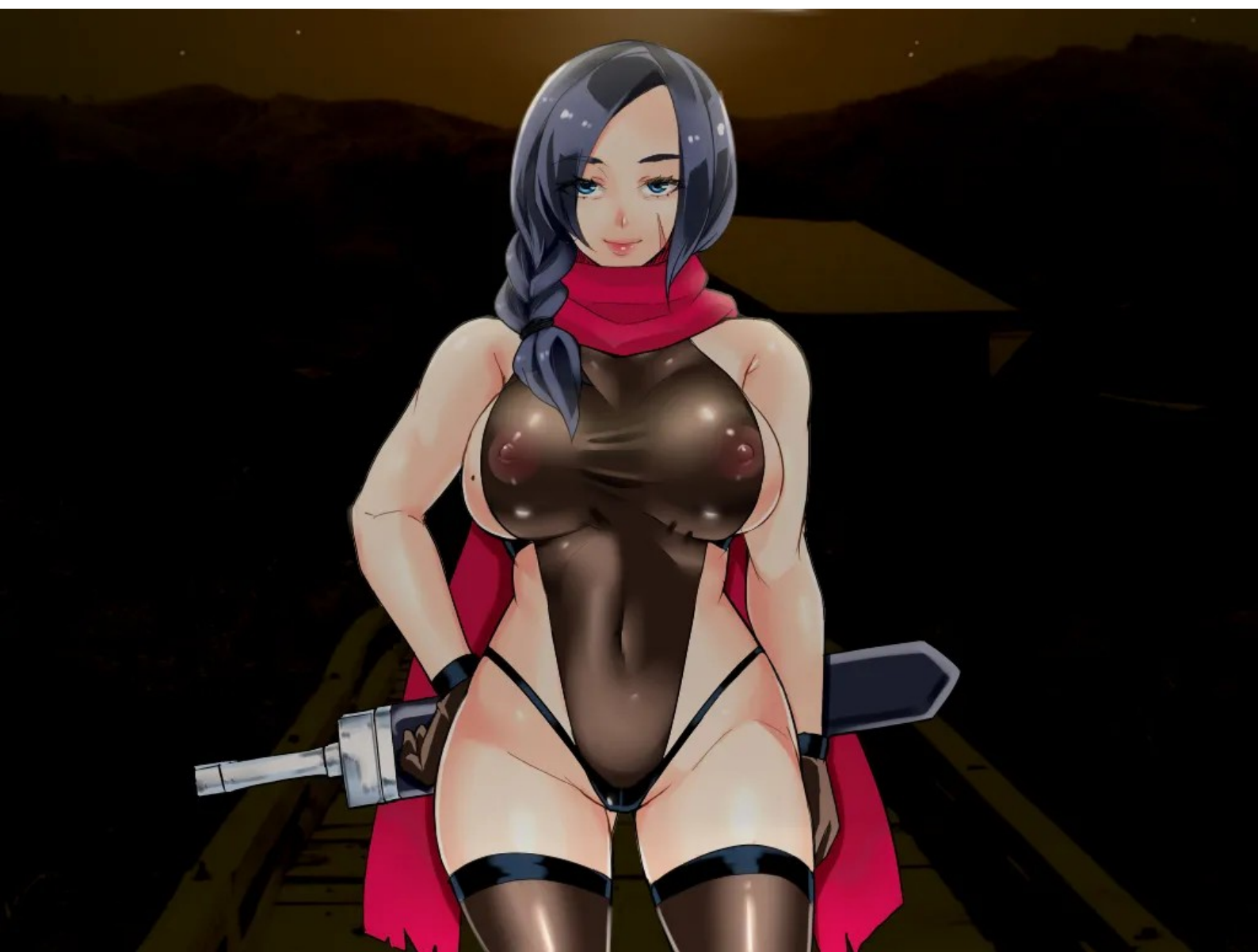
彼を家に連れ帰ってからは
毎日セックス漬け。
本当に幸せ。

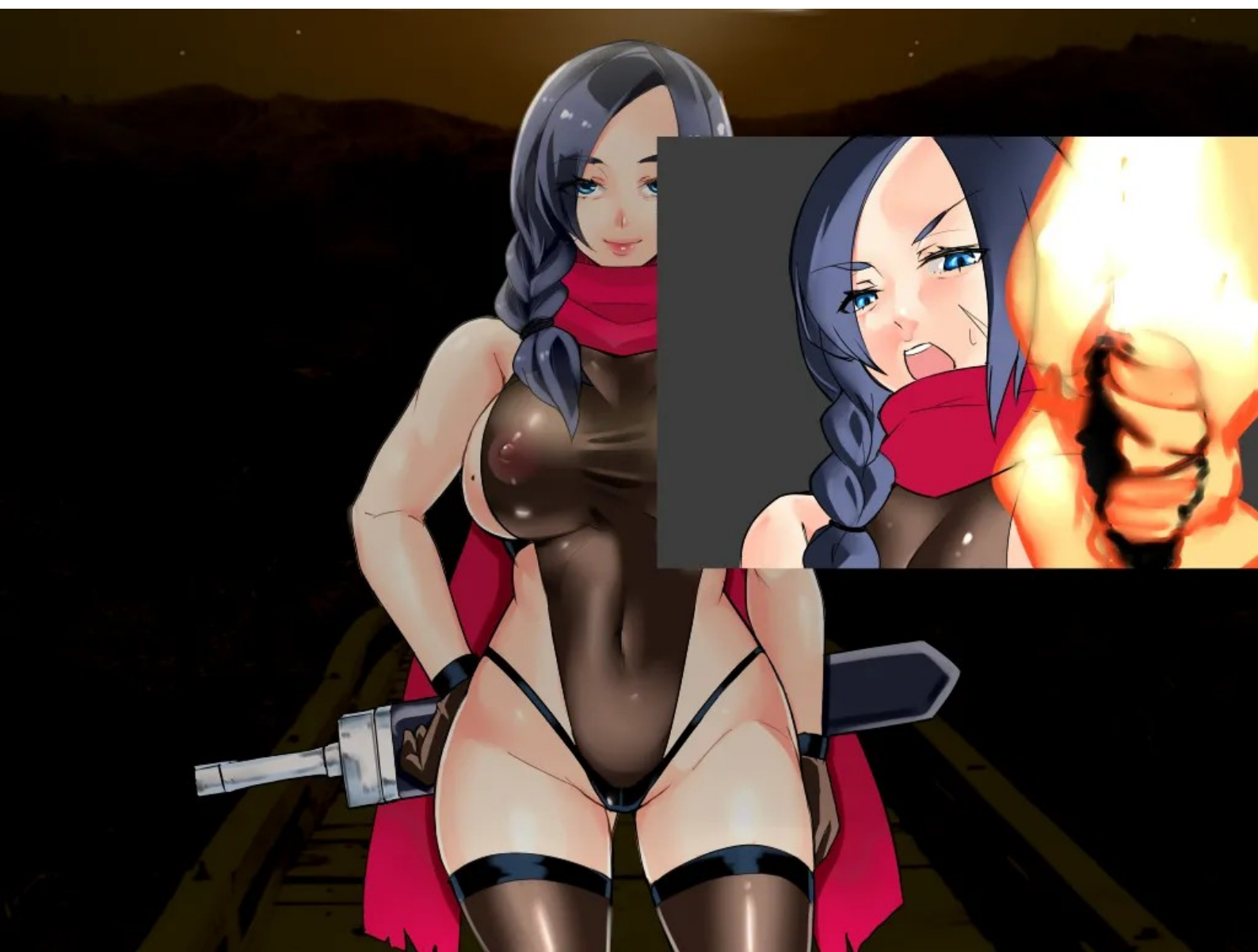


ザチャ













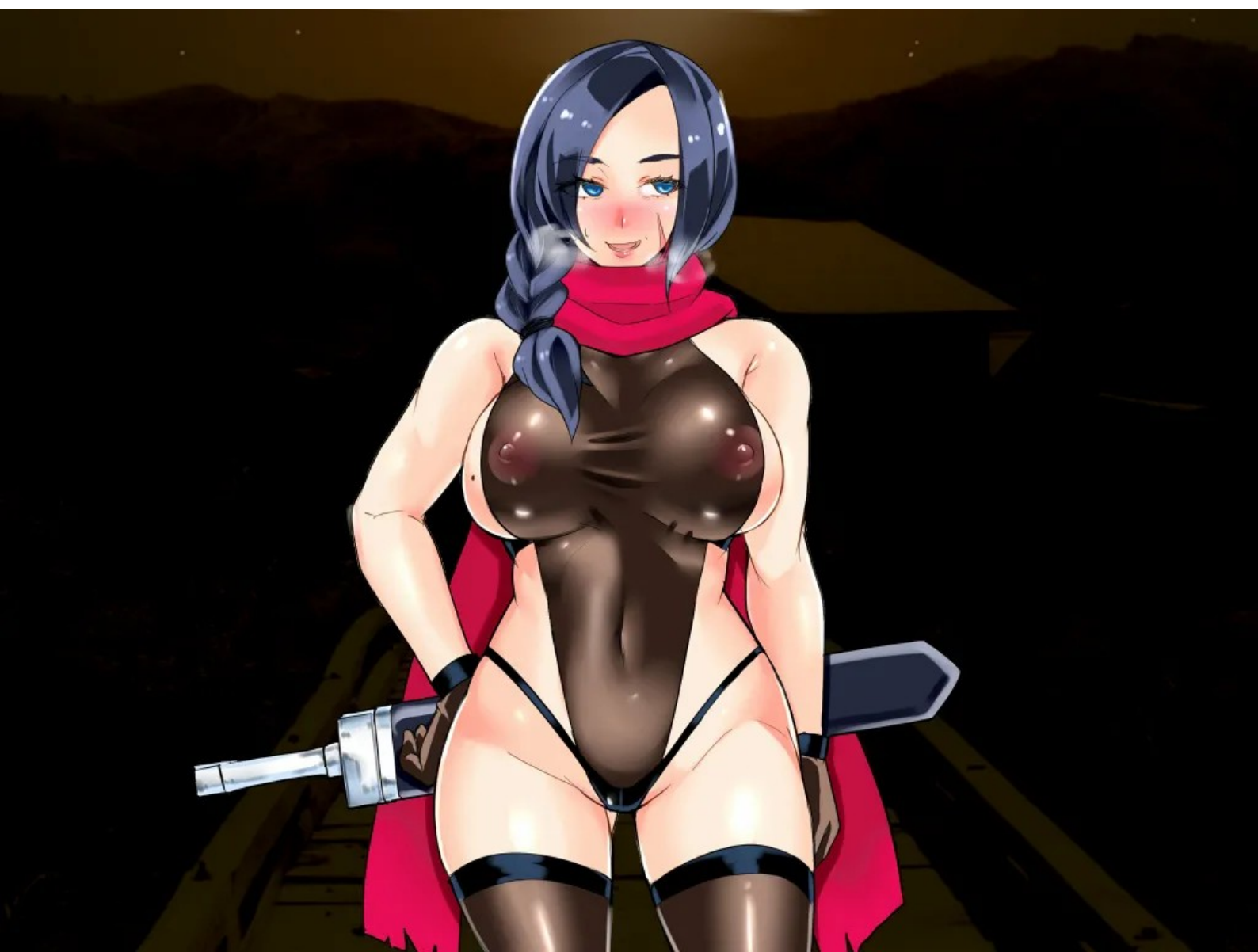






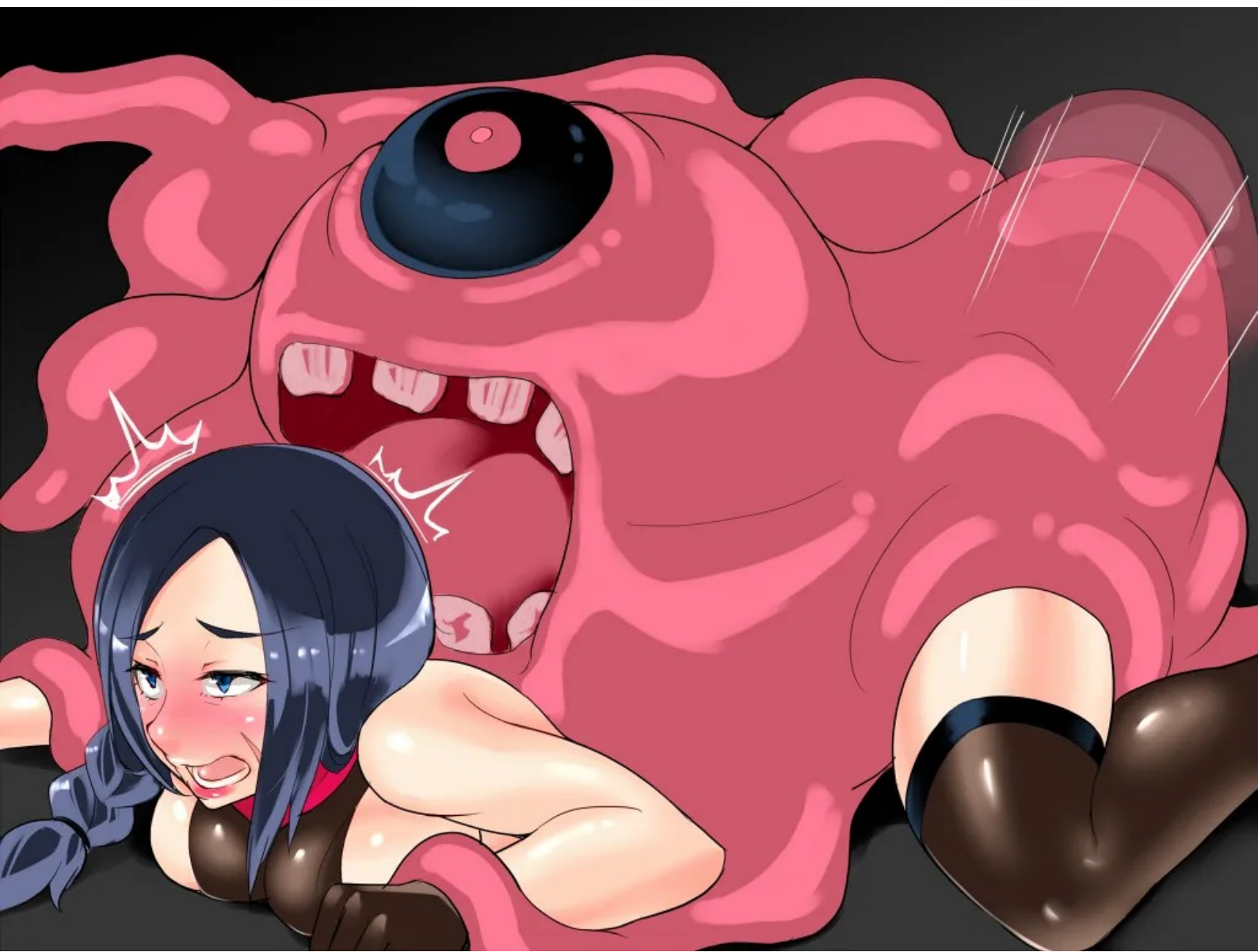


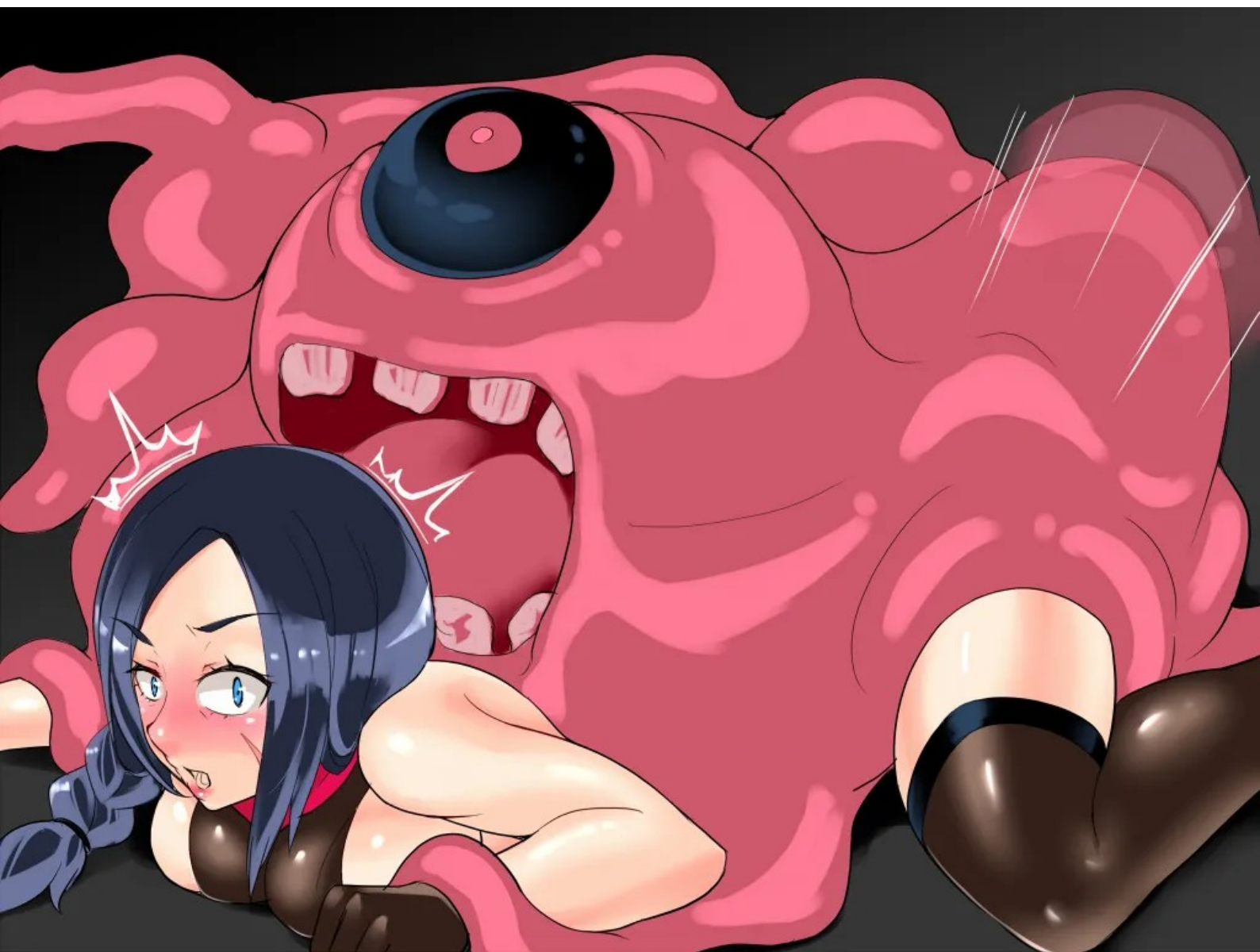


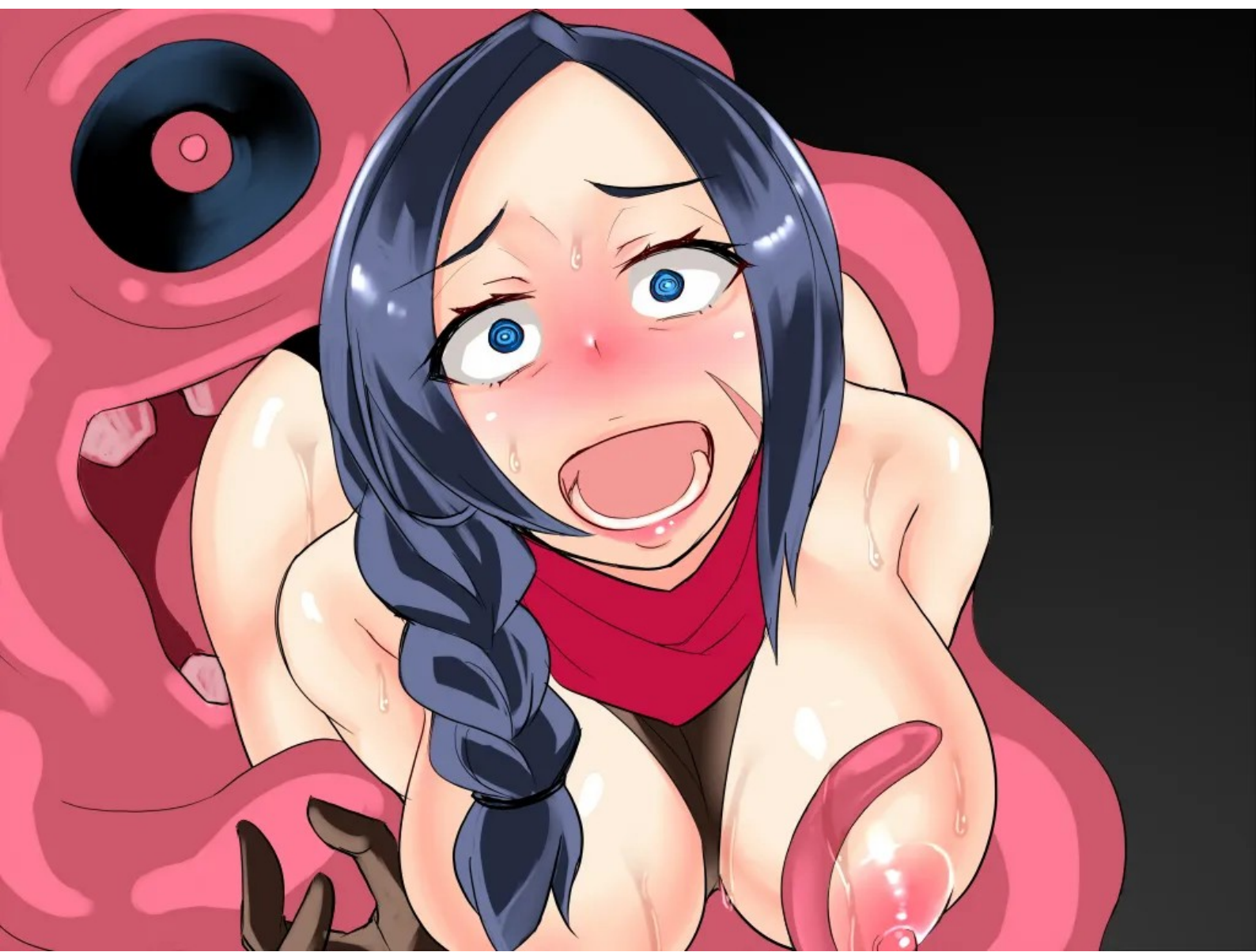








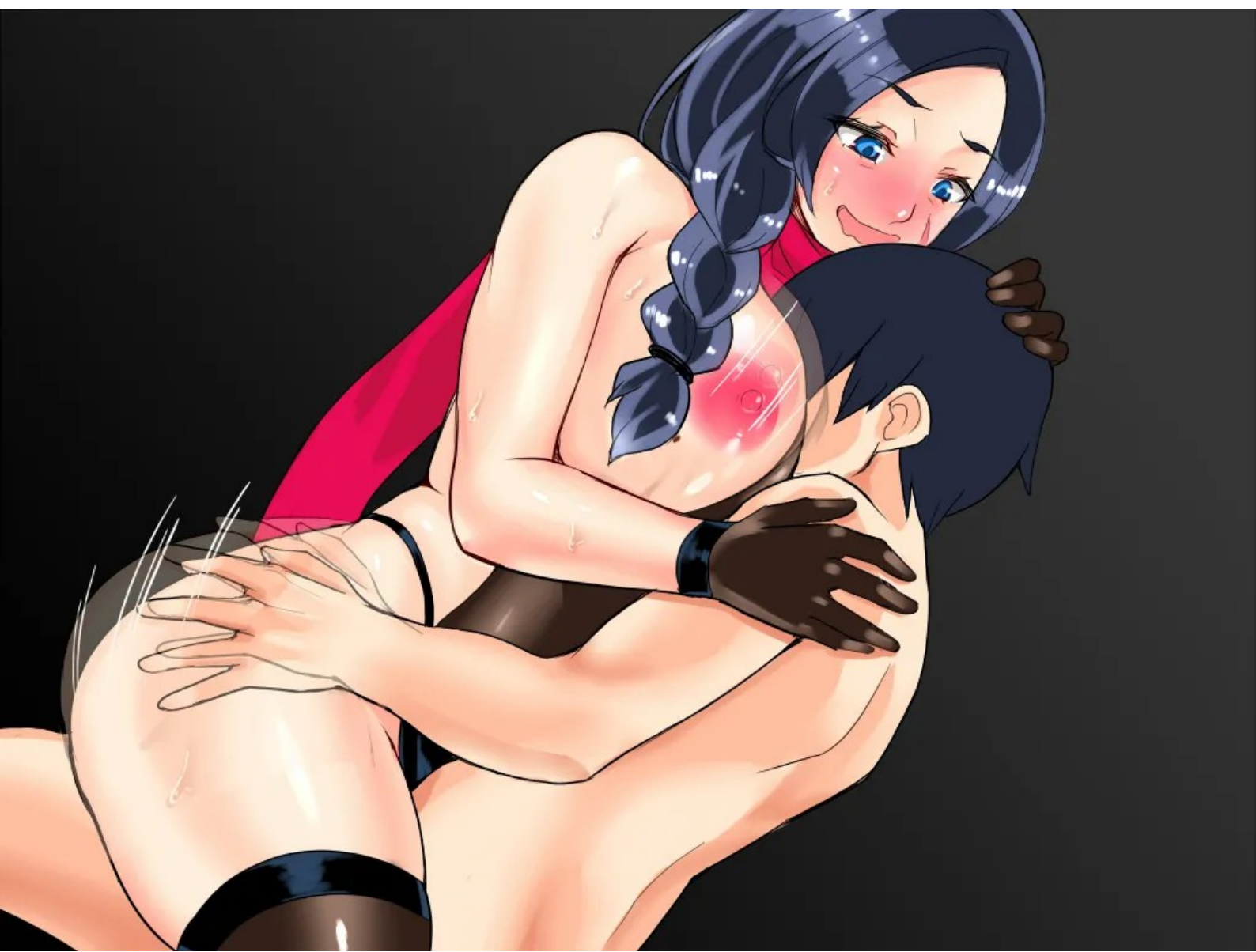


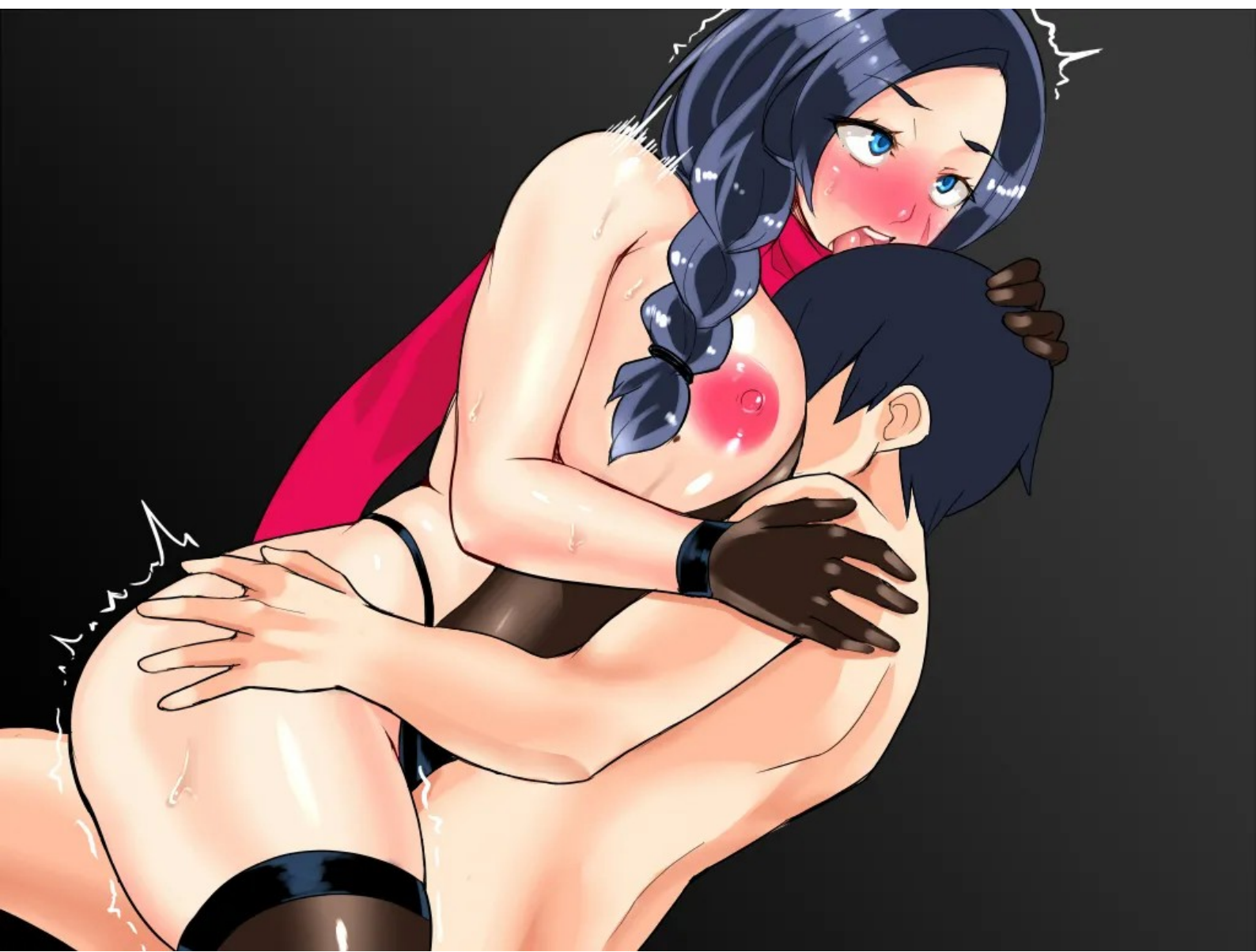
















昔はハンターとして名を馳せた私も
今では愛しの息子と二人暮らしだ。
同業だった父親…あの人は
昔事故でモンスターに不意を突かれ
あつけなく帰らぬ人に…。
親一人子一人の私達が住んでいるのは
モンスターが蔓延る人里離れた土地。

けれども豊かな食物と水に恵まれていた。
土地を守るため日々私は
進入してくるモンスターと戦っていた。
いつかは遅しく育ったわが子と
共に土地を守っていくつもりだった。



今日も日課である敷地内の見回りを行っていた。
夜はモンスター達が活発に活動をする時間だ。
だが段々とモンスターも減り
安全になっていったこの土地。
そんな安息の日々が私の警戒心を鈍らせた…。





気配を殺しこちらを伺っていたモンスターが
一気に触手を私に放った。
見た事がないタイプだった。
どこからか流れてきた奴かもしれない。
完全に不意を突かれ
身動きが取れなくなってしまった…

(ああ…こんな簡単に死んでしまうなんて…
母さんはここまでみたい…
私の分まで強く生きて…)

我が子の事を思い、死を覚悟したその時だった。



「えっ……ああ……!?!」

触手は私の膣内へと侵入を始めた。
まったく予想だになかった出来事に
ますますわけがわからなくなる。
しばらく誰の侵入も許していなかった場所に
突如としてモンスターの体の一部が
無理矢理に入ってきた。
ひどい嫌悪感と得体の知れない恐怖を感じていた。

ズクッ

ズッ

「くっ…何を……！」

オオオオオ

フ

フ

モンスターは私が怯んでいるのを見逃さず乱暴に押さえつけまるで生殖行為を行うかのように私の膣内を犯しはじめた。反撃のチャンスを伺い一気に仕留めよう…。そう思ったのだが…

モンスターはより激しく
触手を突き上げてきた。
たまらず私は声を漏らした…。

あつ…あんっ!!

イルン

ストン

イラッ

自分でも信じられなかった。
モンスターを相手に
しかもこんな危険な状況で私は
なんとという声を出しているのだ…
だが下半身から容赦なく伝わってくる快感は
私の忘れかけていた
『女の喜び』を思い出させた。



こちらの弱い部分を狙うかのように反応によって
攻め方を巧みに代えてくる。
耐えようの無い快楽に流され
無抵抗になった私を見逃さず
ピストンの速度が上がってくる。
モンスターの生殖器と思われるモノは
ビクビクと痙攣しながら膨張を始めた。
そして…

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

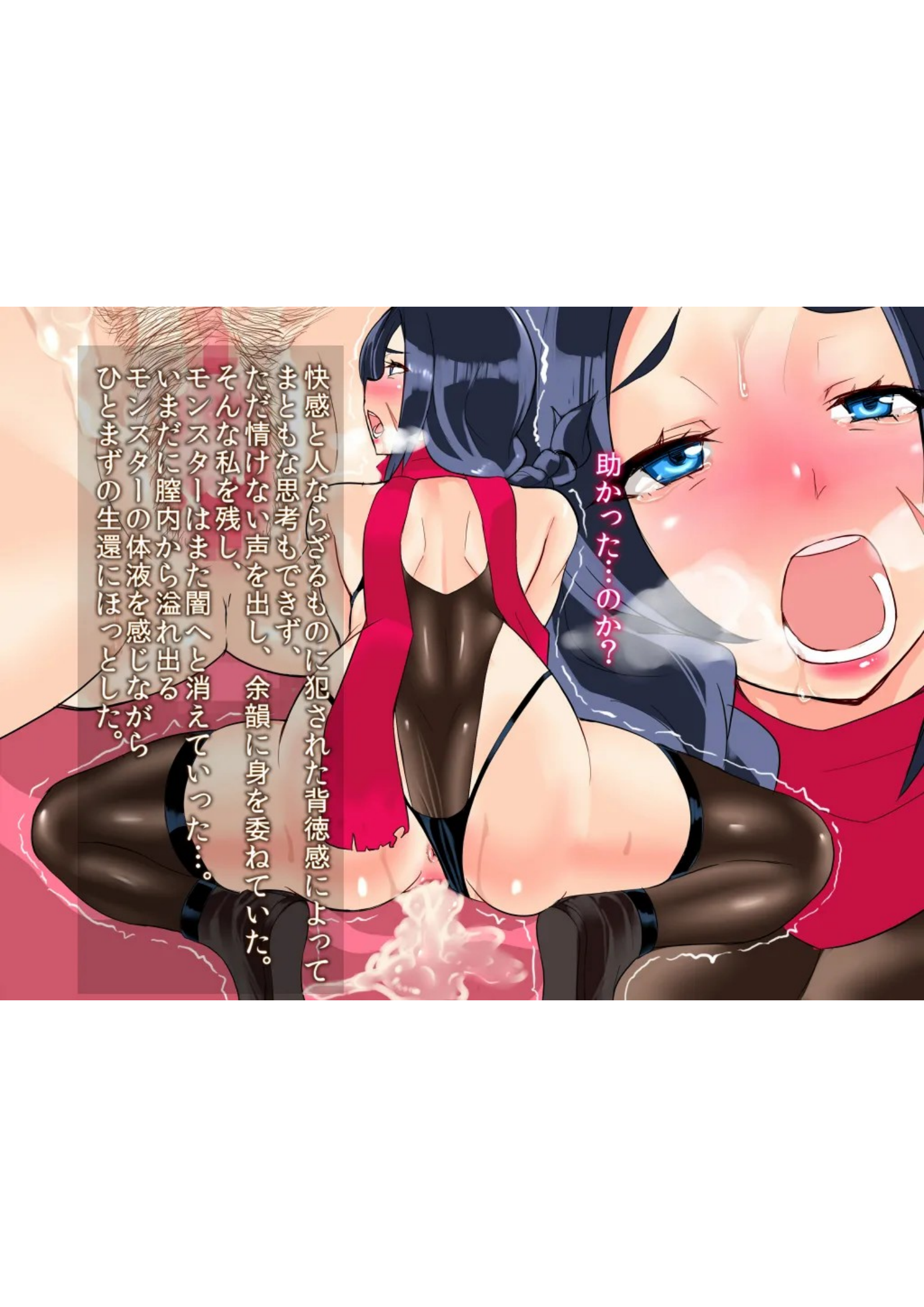


熱いくらいのモンスターの体液が
私の中に放出された。
その衝撃で私も果てた。
モンスターの手によって絶頂させられたのだ。

おほ

トッパ

びやう



助かった…のか？

快感と人ならざるものに犯された背徳感によって
まともな思考もできず、
ただ情けない声を出し、
余韻に身を委ねていた。
そんな私を残し、
モンスターはまた闇へと消えていった…。
いまだに膣内から溢れ出る
モンスターの体液を感じながら
ひとまずの生還にほっとした。

母さん ぼーっとしてどうしたの？

え ええ…大丈夫 ちよつとね…

我が家に帰りあのモンスター[↑]の事ばかり考えていた。
一体何が目的だったのか何故生かされたのか…。
息子には何も話さなかった。
ただしつかりと私の体にあの快楽は刻まれていた。
下半身が疼いてしょうがない。

…明日またあの場所に行けば
「彼」は犯してくれるのだろうか。



気持ちいいでしょう？
セックス： おち○ちんが
母さんのナカでビクビクしてる

ううっ……ううっ……

母さんね 彼の事愛してるのよ
もつと気持ちいい事してくれるの 彼
すごいでしょ？

なぜ泣くんだろう。
分からない。
こんなにもセックスは気持ちいいのに。

でもあなたのチ○ポも気持ちいい……
父さんに似てきたわね……
母さんもうイっちゃう……
あたなも一緒に……！

ズッ
ズッ
ズッ

母さん…母さん！

熱いのがナカに入ってくる…
息子とのセックスで絶頂してしまった…

気持ち…よかった？

もう…隠しておく必要もないわね
彼の事受け入れてくれるわよね…？
一緒に暮らすのよ

母さんは…それで幸せなの？

もちろんよ
母さんも一人の女…
雌だから…



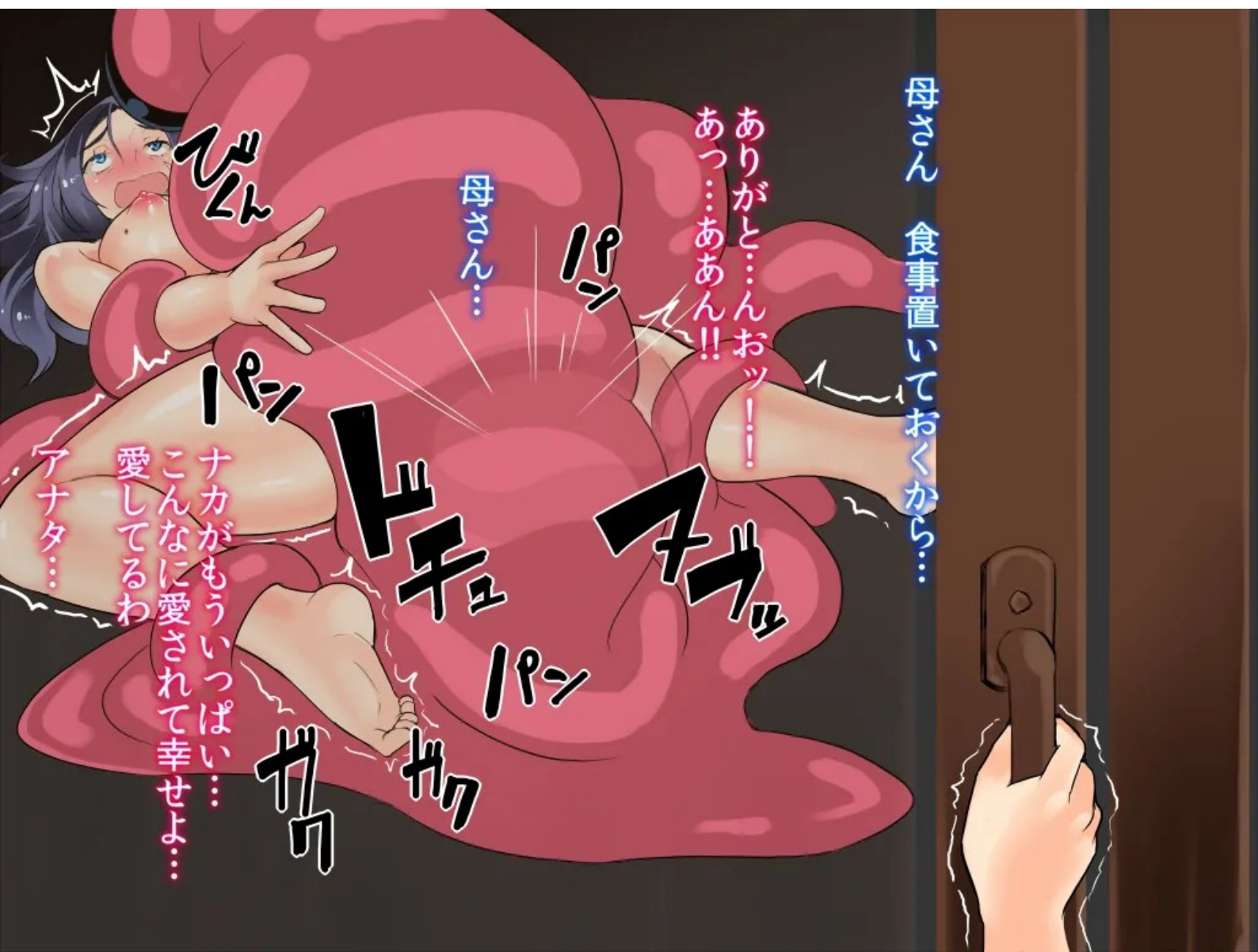


彼を家に連れ帰ってからは
毎日セックス漬け。
本当に幸せ。



ザ
チャ





そして翌日 あの場合に「彼」はいた。
襲い掛かってくる様子は無い。
恐る恐る私は彼に恥部を曝け出し彼の反応を待った。
モンスター相手にこんな無防備な…
あの夜から私は完全におかしくなっていた。





来た：彼は触手を伸ばし私の体を愛撫し始めた。
なんて優しく気持ちのいい愛撫なのだろうか。
股間から聞こえる水っぽい音に
自分も愛液を溢れさせている事に気づいた。

『来て：』 我慢できなくなった私は
心の底から彼を求めた。

ボ
チュ

ト
チュ

彼は私に覆いかぶさり、セックスを始めた。

そう。これはセックスなのだ。

私はモンスターとの間に男女の愛と

同じモノを感じていた。

そう思った瞬間に快感は何倍にも膨れ上がった。

何も考えず 彼からの愛を受け止めるだけ。

なんて幸せなんだろうか。

おま○こを突かれる度に

私は我慢もせず嬌声を上げた。

あ
わ

あ
わ



母さん!! 一体何が…?!

私は一気に青ざめた…
息子がこんな私の姿を…?
色んな感情が一気にわき上がり
頭の中はパンクしそうだった。

なんで…(うん)…に
あつ…く
んあつ!!

遅いから心配で見に来たんだ…
今助ける! 僕だってこいつくらい…!

やめて!
彼を殺さないで!!

えっ…?



自分でもおかしい事を言っているのは
分かっていた…
だが彼を守らなくては…

彼はモンスターだけど私の事を
愛してくれているの
わかるの!!
体を交えて伝わってくるのよ!!

母さん こいつと…まさか…?

そうよ セックスして
愛を感じあっているの…
分からない?

わからないよ!



どうすれば分かってくれるの…
そう そうよ
セックスの気持ちよさを
あなたにも教えてあげる！
母さんの体で…！

母さん何を…！

ニボ

ガイ

もう止まる事は出来なかった…。
わが子のチ○ポを露わにし、口にはお張った。

ほら 段々硬くなってきた…



今気持ちよくしてあげる…。

母さんやめて…

はぁ…
はぁ…

力を抜いて…
母さんに全部委ねて…



母さんのナカ…どう？

母さんとホントに…セックスを…
母さん どうしちゃったんだよ…！

息子のチ○ポの形は少し…
今はもう居ないあの人を
思い出させる形をしている。
これもこれで…気持ちいい。
ちよつと彼に罪悪感を感じている。
でも彼を殺させないためだ。

愛しているから…。



